哀しみのその先に。

美紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
哀しみのその先に。

【Ｎコード】
Ｎ８７３６Ｃ

【作者名】
美紀

【あらすじ】
異世界より来たり――幽霊を極楽へと送りだし、異国の平和を願わん。しかし、それは真か否か―貴方の魂を地獄（ヘルヘブン）天国へ

第一話：ヘルヘブン

「沙ー夜架！」

突然、背後から私の名前を呼ぶ声が聞こえた。
振り向いたら、友達の七原美樹がいた。

「いっつも人の名前大きな声で呼ぶな！って言ってるでしょ！！」

私がそう怒鳴ると、「へへっごめーん」と反省している様子も見受けられない顔で謝ってきた。

「次言ったら殺す。」

「えーー？！ちょっ！ごめんなさい！今度から気を付けます！！だからそれだけは勘弁ーーー！！」

私がそう言うと、美樹は凄い形相で謝ってきた。

「ははっ、冗談だよ。」

軽く笑いながら言うと、美樹はあまり信じていないのか、「本当にいー？？」と聞いてきた。その返答に「本当だよ！」と返すと安心したのかため息混じりに「吃驚した～」と胸を撫で下ろした。

「バ～カ。信じないでよね！この鈍感人間！」

「うわヒドッ！そう言ってる沙夜架だって鈍感じゃん！」

「んなわけないでしょ。美樹、あんたの基準おかしいんじゃない？私は鈍感じゃなくて、鈍いだけ！」

「それが鈍感って言うんだよーー！！」

そう訳の分からない言い合いをしながら家路を歩いていた。
学校帰り、私達はお金があれば喫茶店等に寄ったりして帰っている。
お金が無い時は別だけど・・・

暫く言い合いをしていたら、もう交差点に着いていた。この交差点で、私達は別れる。

「じゃ、またね！美樹」

「うん！バイチャー」

お互い手を振ってそれぞれの家路に着いた。

「ふぅ～全く。美樹ったらいっつもあんなテンションで疲れないのかな・・」

【お前も元はあれじゃね？】

「キル！！」

ポツリとそう呟くと、後ろから私の発言に続けて話す声が聞こえた。
振り向くと、小柄な少年が背後に立っていた。

否、浮かんでいた。

【暇だからきちった☆】

「きちった☆じゃないわよ！見られたらどうするの？！」

私がそう怒鳴ると、“キル”と呼ばれた少年は

【良いじゃ～ん。べ・つ・に！それにさ、俺の事見えるのって霊感が強い奴にしか見えないぜ？だって俺、幽霊だし。】

「あー。。もう、分かったわよ！でもね、周りの人間が見てみれば怪しいの！分かる？？全く、この異世界じゃ霊が見える人間が少ないとかまぢムカツクんだけど！」

【まぁまぁ、人気が少ないからってんな事でかい声で言うなよ。それこそ怪しいぜ？】

地団駄を踏みながら怒鳴り散らしていると、キルが注意に入った。

「わかってる！」

【本当かねぇ～？】

「本当よ！」

またちょっとした喧嘩をしつつ家路を歩く。

先程も話した通り、キルは幽霊だ。霊感が無い人間には見えない。

つまり、端から見れば沙夜架は一人で話しながら歩いている怪しい人となる。

「全く。少しくらい部屋で待っててくれたって良いじゃない！」
【だって迎えに来ないと沙夜架、仕事サボるだろ。暇だし来てやってんの！！】
「はいはい！わかりました。で、今日の仕事は？」
【〇〇市の一番でかい交差点で轢き逃げがあって、被害者は病院に搬送されてまもなく死亡。被害者の名前は神城昌。そいつの魂を地獄天国に送る。今回の仕事はそれ。】
キルが簡単に説明すると、沙夜架は興味なさそうに「ふぅ～ん。」とだけ呟いた。
「じゃ、さっさと着替えて行くかな。」
気が付くと、家の門の前まで来ていて、沙夜架はそれだけ言うと家の中へと入って行った。キルはその間、門の前で待っている。
言い忘れていたが、沙夜架は異世界の人間で、沙夜架の世界の人間は、全員沙夜架と同じように霊と暮している。その中で、一番霊感の強い者が国から選ばれた霊と共に別の世界へと飛び、その世界から自縛霊などのを霊を地獄天国に送るという仕事をしていたのだ。
沙夜架の世界は“Ｓｏｕｌ　Ｐｅｒｓｏｎ　Ｃｏｕｎｔｒｙ”と言って、霊と人間が共に生きて行くという世界で、別世界と違って、自縛霊や悪霊などもいないに等しい。だから異世界で自縛霊などが問題を起す前に、霊を地獄天国に送るという使命があるのだ。
「お待たせ！さてと、行きますか！」

【おぅ！】

着替えが終わった沙夜架は、キルをつれて〇〇市の交差点へと向った。

「あなたが、神城昌さんね？」

【ここはどこだ。何故私の足が無い、何故お前は私の名を知っている。】

「ふふ・・・質問の多い方ね。ここは〇〇市の交差点。ここであなたは轢き逃げに遭いました。・・・あなたは今、死んでいます。」

そう沙夜架は説明すると、神城は驚いたような表情をし、そして、悲しそうな表情をした。

【君は、私を迎えに来たのか・・・？】

神城がそう尋ねると、沙夜架は「ええ」とだけ答えた。

【なら早く私を天国にでも地獄にでも送るが良い。このままでは未練がましくて仕方がない・・・それに早く、あいつの元へと逝きたい。】

神城は切なそうな表情をし、沙夜架の方へと顔を向けた。

「あいつとは？」

【私の妻さ。４年前に事故でね・・・】

「・・・それは、済みません。思い出させてしまって。」

【良いさ、それに、私は妻の事を忘れた事など一度も無い・・・】

「愛していたんですね。」

【あぁ・・・。だから、早く妻の元へ――】

神城がそう言うと、沙夜架は軽く頷き、キルを呼んだ。

「やるよ、キル」

【了解！】

キルが言うと、沙夜架は瞳を閉じ、手を振り上げた。

「神よ――」

「この者は今、地獄天国への道を望んでいる。」

「この者は、地獄か天国、どちらの世界が相応しいか――？」

〔――ヘブン〕

「神城昌、天国へと導かん――――」

手を振り下げると、神城の周辺が光り輝いた。

光の中で神城は、にこりと微笑むと、【ありがとう】と言った。

「さてと、仕事終了！帰るよ！キル。」

【腹減った～】

キルに呼びかけると、いやにも疲れたと言う顔でそう言った。

「霊もお腹空くのね。」

【んなわけねぇーだろ、なんとなくだよ、なんとなく！】

「ふぅ～ん。じゃぁ恋もするの？」

【そんなの当たり前だろ！お前バカだろ！】

「何よ！あんただってバカなくせに！」

【なぁにぃ～やるか？！】

「臨むところよ！」

そして二人は、また喧嘩(ケンカ)をしながら家路へと着いた――。

××県〇〇市　神城(かみしろ)　昌(まさし)

天国(ヘブン)

いつまでも奥様(おくさま)とお幸せに――

第二話：殺人鬼（前書き）

＊この話しは多少残酷な言葉があります。ご注意下さい＊

第二話：殺人鬼

死刑場

「殺して何が悪い！俺はなァ死んでもお前等人間を殺しつづけてやる！ザマァ見ろぉ！ギャハハハハッ！」

男はそう残して死んでいった。

【沙夜架！おい沙夜架！起きろ！仕事だぜ！】

「ん～。。今日日曜でしょー？仕事休む。おやす・・【あの連続殺人犯が死んだ！死んでも殺しつづけるって残したらしいぜ！】え？！」

キルに起され、日曜だからと二度寝しようとした沙夜架だったが、キルの二度目の発言で一気に目が覚めた。

【俺の霊友達が言ってたんだけどさ、この間からこの辺うろついてるらしい！】

「わかった！今着替えるから、今どの辺にいるか分かる？」

【南町４番地のデパ地下だぜ！】

「了解！」

沙夜架は急いで着替え、予め焼いてあった食パンを咥えながら家を出た。

南町４番地　地下街

「うっ」

ある一人のスーツを着た男が急に苦しみ出した。
そこに、近くにいた地下街の女店員が駆け寄ってきて、「どうかなさいましたか？！」と慌てた様子で尋ねてきた。

「く、苦し・・首が、締め付けられ・・うぐっ」

よく見ると、男の首がまるで誰かに締め付けられているかのような痕がどんどん濃くなっていく。それを見た店員や客は悲鳴を上げながら男から逃げて行った。

「連続殺人犯、本山斬弥」

全員逃げた事を確認するように一人の高校生ぐらいの少女と、隣に小柄な少年が男の前に現れ、少女がそう言った。
すると、男の首の締め付けられた痕は濃くなるのが止まり、男は余程苦しかったのか、息を荒くしながら近くに転がっていた鞄を掴み悲鳴を上げながら逃げて行った。

逃げて行ったのを確認し、少女、否、沙夜架はこう続けた。

「あなたが本山斬弥で間違いないわね？」

沙夜架がもう一度言うと、ポウ・・・と人型に黒く光り、少しするとその中から男が現われた。

【お前、俺の事が見えるのかァ？まぁどうでもいいけどなァ、次は女ァお前から殺ってやらァ】

本山が言うと、本山が沙夜架に襲いかかってきた。

「フフ・・・殺れるもんなら殺ってみなよ・・・キル！」

【待ってました！】

「神よ、この者は地獄天国への道を拒み、歯向かって来た――」

「地獄か天国。この者に相応しい罰とは何か――？」

〔ヘル――〕

「本山斬弥、地獄へと導かん――」

言い終えると、本山は黒い光に包まれた。

【な、なんだこれは?!やめろ!行きたくない!地獄になんていきたくなっ・・ギャァァァァァァ!!!!!】

黒い光が本山を押し潰(つぶ)して行くと、本山は悲痛(ひつう)な叫(さけ)び声を上げ、消えた。

「今日はちょびっとてこずったね。」

地獄へと人間(ひと)を送った後、少しだけ気分が重くなる。

【だな・・・】

それは、キルも同じだったようで、表情が暗い。

「帰ろっか・・・・・」

【おぅ・・・】

こういう時に思う。

私達のしていることは、正しい事なのかと――――。

××県南町　本山(もとやま)　斬弥(きりや)

地獄(ヘル)

永久(とわ)に、罰を受けん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8736c/

哀しみのその先に。

2010年10月22日10時07分発行